



# 私の研究

## 大学生活への満足感と活躍希望 —16年間の変化と現在—

**菊地 則行** (きくち のりゆき)

公立大学法人会津大学  
文化研究センター  
教授



### 1. はじめに

私の専門は青年期の教育心理学です。大学では、教職課程と教養科目の心理系の授業を担当しています。会津大生の意識の経年的変化と最近の傾向の一端を、私がかかわった学生生活意識調査から紹介します。

会津大学・学生生活調査は、大学が学生の生活と意識の実態を把握し、学生支援に活かす資料を得るために行われています。調査は学生支援委員会（旧厚生補導委員会）が実施しています。調査内容の作成、結果の整理などに同僚の中澤謙先生と私がかかわっています。調査は、開学5年目の1998年から1年おきに2016年まで15回実施されています。毎回4月あるいは5月に全学生を対象に行われています。実施時期が年度初めのため、新入生と2年生以上の在籍生には違った内容の調査が実施されています。

本稿では、2年生以上を対象とした調査結果を紹介します。調査対象学生は、前回の2014年調査では2年生以上の在籍学生808名で、回答者数は489名（回答率60.5%）でした。過去の調査の回答者数・率もほぼこれと同じです。

### 2. 満足感の16年間の変化

会津大生の意識の経年的変化の例を学生生活への満足感で紹介します。学生生活への満足感（以下、満足感と略）は、最初の調査だった1998年調査から2014年調査まで同じ質問内容で調査しています。具体的には、学生生活の11の側面についてそれぞれにどの程度満足しているかを、次の5段階評価で回答してもらいました。「5. とても満足している」「4. どちらかといえば満足している」「3. どちらともいえない」「2. どちらかといえば満足していない」「1. まったく満足していない」です。

主な7側面の経年的変化の特徴を1998年調査時点での満足感を基準としてみると、2014年時点での満足感は全体としては高くなっています。図1に4年ごとの平均値を示してあります。各回の調査とも2年生から4年生までの学年間の満足感に統計的に有意な差はありませんでしたので、4年生のデータを示しました。

変化の特徴には3つのパターンがあります。

1つ目はいったん満足感が下降しその後上昇して、1998年の時よりも満足感が高くなっているパターンです。「1 友人を得ること」「2 知

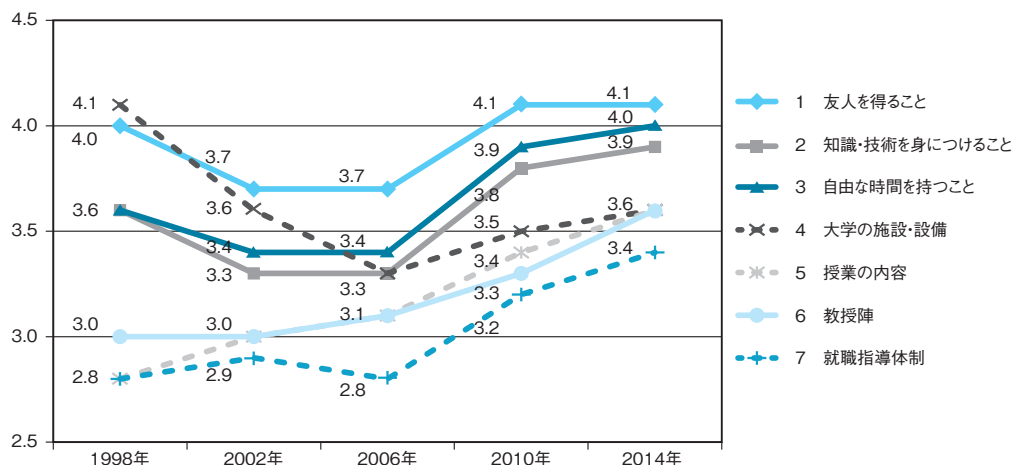


図1 満足感

識・技術を身につけること」「3 自由な時間を持つこと」がそのパターンの側面です。この3つは、他の側面と比べて満足感が高く、毎回の調査でも同じ傾向を示しています。「1 友人を得ること」が高いのは、コンピュータという共通の興味・関心を持つ学生が多くいることによるのかもしれませんが、友人の有無についての質問結果によると、多くの学生は友人を持っていると回答しています。たとえば、2014年調査では、授業・課題・テストなどの学習面で助け合える友人がいると答えた学生は92.7%です。また、生活面の悩み・心配ごとを気楽に話せる友人がいると答えた学生は86.2%です。「2 知識・技術を身につけること」に満足感が高いのは、学生の学習興味と大学のカリキュラムが合っていることによると思われる。これまでの学生生活調査の結果によると、会津大生のほぼ80%から90%がコンピュータを勉強することを望んで入学しています。その希望つまり学習興味と、会津大学のコンピュータ理工学に特化されたカリキュラムや教員構成が重なっていることによるものと思われる。「3 自由な時間を持つこと」への満足感は学年間で差はありません。上級生になると授業・課題で忙しくなるのですが、それとは関係がないようです。高校時代までの学校や家での生活は自分の裁量で動け

る余地が少なかったのに比べて、大学生活では自分の裁量で動ける余地が格段に広がったことによるのかもしれませんが。精神的に自由な時間に満足感を持っているという意味かと思われます。

2つ目はいったん満足感が下がってその後上昇するが、1998年時での満足感レベルまでは高まっていないパターンです。それは、「4 大学の施設・設備」です。1998年時で全側面のなかでも高い満足感の一つになっていました。さすがに大学の建物や敷地の見た目は古くなってきています。にもかかわらず満足感が上昇してきたことは、コンピュータなどの機器・システムの充実が評価されているのかもしれませんが。

3つ目は上昇し続け、1998年時よりも満足感が高まっているパターンです。「5 授業の内容」「6 教授陣」「7 就職指導体制」がそれです。これらは、1998年時点では満足とも不満足とも「どちらともいえない」レベルでした。しかし、満足感はすこしずつ上昇し、「どちらかといえば満足している」に近いレベルになっています。これらは大学教育・支援の重要な柱です。満足感が上昇し続けていることは大学の教育・支援の力が増していることを示しているのかもしれませんが。ただし、「1 友人を得ること」「3 自由な時間を持つこと」よりもまだ低い満足感に留まってい

ます。

以上、学習面、私生活面ともに満足感を高めつつある会津大生の14年間の変化を紹介してきました。ただし、1998年から2006年にかけて複数の側面について満足感が下降し、その後上昇するという変化もありました。その原因を特定することはできませんが、関連を推測させる大学の動きとしては、2008年度にカリキュラムが改正され、学科が再編成されたことがあります。

### 3. 「活躍希望」の現在

会津大生の現在の姿（意識）を、2014年調査の「活躍希望」に注目して紹介します。「活躍希望」とは、卒業後に産業・社会分野でコンピュータの専門家としてハイレベルな活躍をすることを学生が希望することです。この意識に注目する理由は、このような「活躍希望」を持つ学生を大学は育てたいと考えているからです。いわゆる期待される学生像です。また、「活躍希望」は、学生にとっては重要な学習意欲や学生生活意欲になります。

調査方法は、上記のような活躍を希望しているかを質問し、「A おおいに望んでいる」から「E まったく望んでいない」までの5段階で回答してもらいました。回答者は2年生以上の学生（456名）です。その結果が図2です。

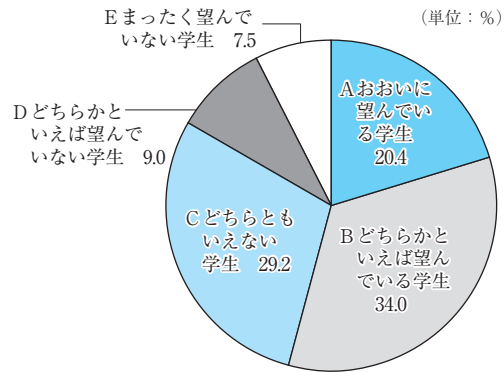


図2 活躍希望学生

「活躍希望」を持つ学生（AとB）は54.4%、どちらともいえないが29.2%、「活躍希望」を持たない学生（DとE）は16.5%です。「活躍希望」を持つ学生は半数程度です。そのうち、おおいに希望する学生（A）は20%ほどです。

次に、希望する学生の特徴を「活躍希望」と関連する2つの調査項目で紹介します。

まず、大学からの「活躍期待」を感じているかどうかについてです。「活躍期待」とは、卒業後に産業・社会分野でコンピュータの専門家としてハイレベルな活躍をすることを大学が期待することです。「活躍期待」は、公式にはディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーなどの教育目標・方針で表明されています。それらは、日常的、具体的には日々の授業内容や教員の態度などの教育的環境・雰囲気を作り、学生の学習意欲や

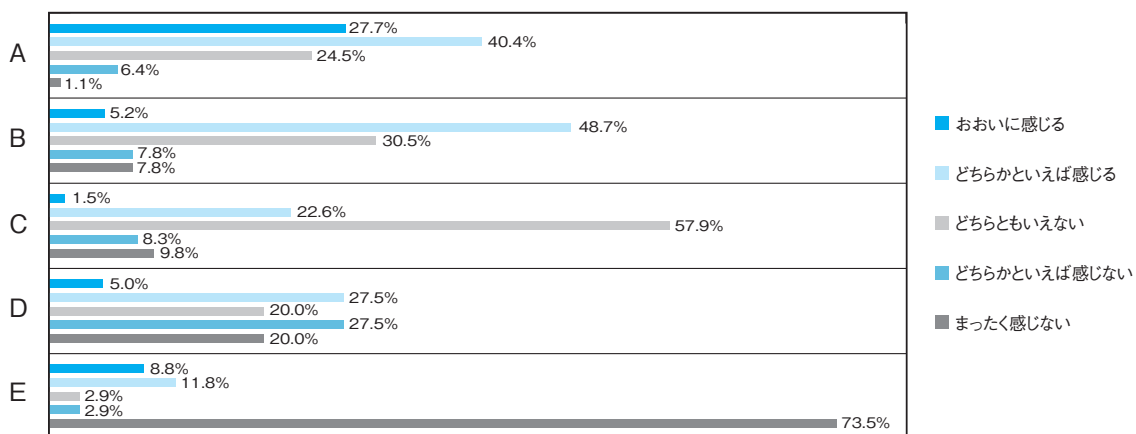


図3 大学からの活躍期待

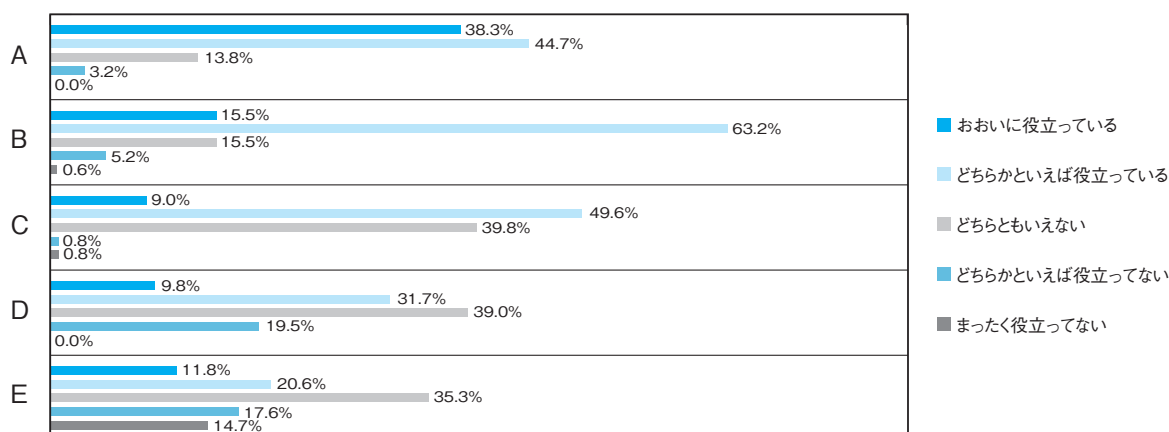


図4 進路選択と大学生活

進路目標に影響を与えます。図3のように「活躍希望」を持つ学生のおおよそ50%（B）から70%（A）は大学からの「活躍期待」を感じています。一方、「活躍希望」を持たない学生は、20%（E）から30%（D）の学生しか「活躍期待」を感じていません。「活躍期待」と「活躍希望」の循環的關係が「活躍希望」を持っている学生には成立していると思われます。つまり、「活躍希望」を持っているから、大学からの「活躍期待」を感じることができる。感じるからいっそう「活躍希望」が強まるという関係です。

2つ目に、卒業後の進路を考えるうえで大学生活が役立っていると評価しているかどうかについて紹介します。図4のように「活躍希望」を持つ学生のおおよそ80%（A、B）は大学生活が役立っていると評価しています。一方、「活躍希望」を持たない学生はおおよそ30%（E）から40%（D）しか大学生活を役立っていると評価していません。

多くの学生から役立っていると評価される大学生活の側面は、授業、サークル活動、友人・社会人などのさまざまな人との交流の3つです。「役立っている大学生活はどれか」の質問に対して選択されたものです。選択肢は、この3つ以外は、教員との交流、大学の進路支援、校内での産業人などの講演会・セミナー、バイトやインターシッ

プ、ネット情報です。上記の3つは、「活躍希望」を持っている学生からもそうで無い学生からも同じようにあげられています。一方、学生の進路意識向上や進路選択支援のために大学が取り組んでいる事業は、あまり選択されていません。

以上、会津大生の現在の姿（意識）の一面として、ハイレベルでの活躍を希望している学生を紹介しました。そのような学生以外にもさまざまなレベル・分野で働くことを希望している会津大生がいます。本稿では、会津大学の多様な学生の姿は紹介できませんでした。

#### 4. 最後に

会津大学・学生生活調査を基に、会津大生の経年的変化と現在の様子の一端を紹介しました。心理学を専門としている教員として、大学環境の点検・整備のために今後とも学生の心理学的調査・研究を行っていきたくと考えています。

#### <プロフィール>

宮城県出身、東北大学大学院教育学研究科博士課程後期課程、1994年より会津大学助教授、会津大学上級准教授。日本教育心理学会、日本青年心理学会、日本キャリア教育学会、日本心理学会所属。青年期の教育心理学（進路選択）が専門。